

学 位 論 文 要 旨

氏 名 伊 達 正 起

題 目 An Empirical Study on the Effectiveness of Task Repetition and Noticing of Forms on Facilitating Proceduralization of Linguistic Knowledge in Oral Task Performance
 (口頭でのタスクパフォーマンスにおけるタスクの繰り返しと言語形式の
 気づきが言語知識の手続き化の促進に及ぼす有効性に関する実証的研究)

学位論文要旨 (和文2,000字又は英文1,000語程度)

ACT-R (Anderson, Bothell, Byrne, Douglass, Lebiere, & Qin, 2004) によれば、手続き的知識を構成する産出ルールを構築するうえで、学習者は自身の宣言的モジュールにアクセスしモジュール内にある(明示的)知識を取り出し、その後産出システムを経由し文の中で使用するというプロセスを経験することが必要である。こうした経験を繰り返すことで言語使用のスキルに関する暗示的知識を発達させるプロセスが手続き化である。そして、学習者の第二言語知識の手続き化を促進するうえで、タスク、特にアウトプットタスクが効果的である可能性が指摘されている。さらに、アウトプットタスク遂行中の学習者に形式と意味・機能の結びつきに意識を向けさせ、タスク遂行時における言語の質を高める工夫として、繰り返しが有効である点が先行研究からわかってきている。一方、タスク遂行時に学習者が自身の意識を形式に向けることが困難であることもわかってきている。つまり、学習者がタスクを繰り返し遂行するだけでなく、学習者が形式と意味・機能との結びつきに気づく機会を組み込んだ指導をすることが宣言的モジュール内にある言語知識の取り出しに影響を及ぼし、その結果、手続き化が促進されるのではないかと考えられる。

そこで、学習者の第二言語知識の手続き化を促進するための手段として、口頭でのタスク遂行時にタスクを繰り返すことの効果、及びタスクを繰り返す前に1回目のタスクで産出した言語形式に学習者が意識を向ける機会を与えることの効果について以下の4つの仮説を立て、検証調査することを本研究の目的とした。

- (仮説 1) 同じタスクを繰り返す練習は流暢さと正確さの向上に有効であり、繰り返しを伴わない練習に比べるとより流暢かつ正確な発話をもたらす。
 (仮説 2) 言語形式への気づきを伴う練習は流暢さと正確さの向上に有効であり、気づきを伴わない練習に比べるとより流暢かつ正確な発話をもたらす。
 (仮説 3) 繰り返しと気づきの組合せを伴う練習は流暢さと正確さの向上に有効であり、繰り返しのみあるいは気づきのみを伴う練習に比べるとより流暢かつ正確な発話をもたらす。
 (仮説 4) 繰り返しのみあるいは気づきのみを伴う練習は流暢さと正確さの向上に有効であり、どちらも伴わない練習に比べるとより流暢かつ正確な発話をもたらす。

研究では、大学生に6枚の絵を使った物語タスク(絵をもとに一連の話を作成するタスク)を与えた。参加者は1回の練習時に2つの物語タスクを行う練習を計4回行った。そして、5回目に遂行した2種類のタスク(プリテストと同じ絵を使った同じタスクとプリテストと異なる絵を使った新しいタスク)をポストテストとし、プリテスト(1回目の練習における最初のタスク)の発話と比較し、どのように変化しているのかを調査した。具体的には、「練習時に同じ絵を2回繰り返し使うのか、2回とも異なる絵を使うのか」「練習時に1回目のタスク後に言語形式に注意を払う機会があるのか、ないのか」の組合せにより参加者を4つの実験群グループ(「繰り返しあり+気づきあり」「繰り返しあり+気づきなし」「繰り返しなし+気づきあり」「繰り返しなし+気づきなし」と練習がない統制群グループという5つのグループに分け、練習活動とポストテストを与えた。そして、各グループのデータを流暢さと正確さの観点より分析した。流暢さについては、手続き化の視点より De Jong and Perfetti (2011) を参考に「ポーズの長さ、流暢な run の長さ」という2つの点から総合的に分析した。正確さについては、冠詞と動詞を目標形式とし「目標形式の使用度、誤って使用された目標形式の割合」という2点から分析した。5つのグループのデータを比較分析した結果、4つの仮説はすべて一部が支持され、以下の点が明らかになった。

- (1) 繰り返しと気づきの両方を伴う練習を行ったグループは、ポストテスト時に同じタスクをする場合と新しいタスクをする場合において流暢さと正確さが向上した。さらに、他のグループに比べて、同じタスクをする際により流暢であり、新しいタスクをする際により正確であった。
 (2) 繰り返しあるいは言語形式への気づきを伴う練習を行ったグループは、ポストテスト時に同じタスクをする場合において流暢さと正確さが向上した。
 (3) 繰り返しあるいは気づきを伴う練習を行ったグループは、繰り返しや気づきを伴わない練習を行ったグループに比べて、同じタスクをする際により正確であった。さらに、練習をしなかったグループに比べて、同じタスクをする際と新しいタスクをする際により正確であった。

そして、こうした研究結果から、学習者の第二言語知識の手続き化を促進するためには、教育的介入を伴ったアウトプットタスクを与えることと継続的にアウトプットタスクを練習させることが重要であるという点が示唆される。